
巻数

作者

サンプルサークル

夜行巡査

泉鏡花

【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ

(例) 爺じいさん

一：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 人ごころ心地

〔#〕：入力者注　主に外字の説明や、傍点の位置の指定

〔例〕〔#地付き〕（明治二十八年四月「文芸倶楽部」）

一

「こう爺じいさん、おめえどこだ」と職人体の壮わかもの佼は、そのかたわらなる車夫の老人に向かいて問い懸かけたり。車夫の老人は年とし紀すでに五十を越えて、六十にも間はあらじと思わる。餓えてや弱々しき声のしかも寒さにおののきつつ、

「どうぞまっぴら御免なすつて、向後こうごきつと気を着けまする。へいへい」

と、どぎまぎして慌あわておれり。

「爺さん慌あわてなさんな。こう己おりや巡査おまわりじゃねえぜ。え、おい、かわいそうによつぽど面食あじらつたと見える、全体おめえ、気が小さいらあ。なんの縛くわろうとは謂いやしめえし、あんなにびくびくしねえでもものことさ。おらあ片一方で聞いててせえ少すこ癩かん癩しやくに障さわつて堪こたえられなかつたよ。え、爺さん、聞きやおめえの扮装みなりが悪あいとつて咎とがめたようだっけが、それにしちやあ咎とがめようが激あしいや、ほかにおめえなんぞ仕損しぞこいでもしなすつたのか、ええ、爺さん」

問われて老車夫は吐息をつき、

「へい、まことにびっくりいたしました。巡査おまわりさんに咎とがめられ

ましたのは、親おやじ父今がはじめてで、はい、もうどうなりますかとやらと、人心ごこち地もござりませなんだ。いやもうから意いくじ気地がござりません代わりにや、けつして後ろ暗いことはいたしません。ただいまとても別にぶちようほうのあつたわけではござりませんが、股ももひ引きが破れまして、膝ひざから下むきだが露出してござりますので、見苦しいと、こんなにおつしやります、へい、御規則も心得ないではござりませんが、つい届きませんもんで、へい、だしぬけにこら！ つて喚わめかれましたのに驚きまして、いまだに胸がどきどきいたしまする」

「壮佼はしきりに領うなずけり。

「むむ、そうだろう。気の小さい維むかし新前の者は得て巡的をこわが

るやつよ。なんだ、高がこれ股引きがねえからとつて、ぎようさ
 んに咎め立てをするにやあたらねえ。主の抱え車かかぐるまじやあるめえ
 し、ふむ、よけいなおせつかいよ、なあ爺さん、向こうから謂わ
 ねえたつて、この寒いのに股引きはこつちで穿はきてえや、そこが
 めいめいの内証で穿けねえから、穿けねえのだ。何も穿かねえと
 いうんじやねえ。しかもお提ちようちん灯より見つこのねえ闇夜やみだろう
 じやねえか、風俗も糸瓜へちまもあるもんか。うぬが商売で寒い思いを
 するからたつて、何も人民にあたるにやあ及ばねえ。ん！ 寒かん
らすめ。あんなやつもめつたにやねえよ、往来の少ない処ところなら、
 昼だつてひよぐるぐらいは大目に見てくれらあ、業腹な。おらあ
 別に人の禪ふんどし襠すもうで相撲を取るにもあたらねえが、これが若いもの

でもあることか、かわいそうによぼよぼの爺さんだ。こう、腹あ立てめえよ、ほんにさ、このぎまで腕車を曳くなあ、よくよくのことだと思いいねえ。チョツ、べら棒め、サーベルがなけりや袋ふくろ叩たたきにしてやろうものを、威張るのもいいかげんにしておけえ。へん、お堀端あこちとらのお成り筋だぞ、まかり間違やあ胴上げして鴨かものあしらいにしてやらあ」

口を極きわめてすでに立ち去りたる巡查を罵ののし、満腔まんこうの熱気を吐きつつ、思わず腕さすを擦りしが、四谷組合と記しるしたる煤すすけ提ちよう灯ちんの蠟燭ろうそくを今継ぎ足して、力なげに梶棒かじぼうを取り上ぐる老車夫の風采ふうさいを見て、壮佼わかもは打ち悄しおるまでに哀れを催し、「そうして爺さん稼かせぎ人はおめえばかりか、孫子はねえのかい」

優しく謂われて、老車夫は涙ぐみぬ。

「へい、ありがとうございます、存じます、いやも幸いと孝行なせがれが一人おりました、よう稼いでくれました、おまえさん、こんな晩にや行火を抱いて寝ていられるもつたいない身分でござりましたが、せがれはな、おまえさん、この秋兵隊に取られましたので、あとには嫁と孫が二人みんな快う世話をしてくれますが、なにぶん活計が立ちかねますので、蛙の子は蛙になる、親仁ももとはこの家業をいたしておりましたから、年紀は取つてもちつとは呼吸がわかりますので、せがれの腕車をこうやって曳きますが、何が、達者で、きれいで、安いという、三拍子も揃つたのが競争をいたしますのに、私のような腕車には、それこそお茶人か、よつぽど後

生のよいお客でなければ、とても乗ってはくれませんで、稼ぐに
 追いつく貧乏なしとはいいますが、どうしていくら稼いでもそ
 の日を越すことができませんので、つい、おまわり 巡查さんに、はい、お手数を
 うことはできませんので、懸けるようにもなります」

いと長々しき繰り言をまだるしとも思わで聞きたる壮佼はひとか
 方たならず心を動かし、

「爺さん、いやたあ謂われねえ、むむ、もつともだ。聞きや一人
むすこ息子が兵隊になつてるといふじやねえか、おおかた戦争にも出る
 んだろう、そんなことなら黙つていないで、どしどし言い籠こめて
ひまあ潰つぶした埋め合わせに、さかて酒代でもふんだくつてやればいいに」

「ええ、めつそうな、しかし申しわけのためばかりに、そのことも申しましたなれど、いっとうお肯きき入れがござりませんので」

「あわ 壮俊はますます憤りひとしお憐れみて、

「なんとという木念ぼくねんじん人だろう、因業な寒鴉め、といったところで

仕方もないかい。ときに爺さん、手間は取らさねえからそこいら

までいっしょに歩あゆびねえ。股またひばち火鉢ごんつくで五合とやらかそう。ナニ

遠慮しなさんな、ちと相談もあるんだからよ。はて、いいわな。

おめえ稼業にも似合わねえ。ばかめ、こんな爺さんを掴つかめえて、

剣けんつく突つもすさまじいや、なんだと思つていやがんでえ、こう指一

本さでも指さしてみろ、今じゃおいらが後見だ」

憤慨と、軽侮と、怨えんこん恨とを満たしたる、視線の赴くところ、

麴町一番町英国公使館の土堀のあたりを、柳の木立ちに隠見して、角燈あり、南をさして行く。その光は暗夜に怪獣の眼のごとし。

二

公使館のあたりを行くその怪獣は八田義延はつたよしのぶという巡査なり。
渠は明治二十七年十二月十日の午後零時をもって某なにがしまち町の交番を発し、一時間交替の巡回の途に就けるなりき。

その歩行や、この巡査には一定の法則ありて存するがごとく、
晩からず、早からず、着々歩を進めて路みちを行くに、身体からだはきつとして立ちて左右に寸毫すんごうも傾かず、決然自若たる態度には一種犯

すべからざる威厳を備えつ。

制帽の底ひさしの下にもものすごく潜める眼光は、機敏と、鋭利と厳酷とを混じたる、異様の光に輝けり。

渠は左右のものを見、上下のものを視ながむるとき、さらにその顔を動かし、首を掉ふることをせざれども、瞳ひとみは自在に回転して、随意にその用を弁ずるなり。

されば路すがらの事々物々、たとえばお堀ほり端ばたの芝生しばふの一面に白くほの見ゆるに、幾条くちなわの蛇はの這えるがごとき人の踏みしだきたる痕あとを印せること、英国公使館の二階なるガラス窓の一面に赤黒き燈火の影の射させること、その門前なる二柱ちゆうのガス燈の昨夜よりも少しく暗きこと、往来のまん中に脱ぎ捨てたる草鞋わらじの片足の、

霜に凍て附きて堅くなりたること、路傍にすすくと立ち併べる枯れ柳の、一陣の北風に颯と音していつせいに南に靡くこと、はるかあなたにぬつくと立てる電燈局の煙筒より一縷の煙の立ち騰ること等、およそ這般のささいなる事がらといえども一つとしてくだんの巡査の視線以外に免るることを得ざりしなり。しかも渠は交番を出でて、路に一個の老車夫を叱責し、しかしてのちこのところに来たれるまで、ただに一回も背後を振り返りしことあらず。

渠は前途に向かいて着眼の鋭く、細かに、きびしきほど、背後には全く放心せるものごとし。いかんとなれば背後はすでにいたんわが眼に檢察して、異状なしと認めてこれを放免したるも

のなればなり。

兇徒きょうとあり、白刃ふるを揮ふるいて背後うしろより渠みちを刺ささんか、巡査じゆんさはその呼吸いきの根ねの留とどまらんまでは、背後うしろに人ひとあるということに、思おもひいたることはなかるべし。他ほかなし、渠みちはおのが眼まなこの観かん察さつの一度いちど達たしたるところには、たとい藕くわうし糸いとの孔あな中ちゆうといえども一点いちてんの懸けん念ねんをだに遺のこしおかざるを信しんずるによれり。

ゆえに渠みちは泰然たいぜんと威い嚴げんを存ぞんして、他意たいういなく、懸けん念ねんなく、悠ゆう々ゆうとしてただ前途ぜんずのみを志しすを得えるなりけり。

その靴くつは霜しものいと夜深よるきに、空谷くうこくを鳴ならして遠とほく登き音おんを送おくりつつ、行く行く一番町いちばんまちの曲まがり角かくのややこなたまで進すすみけるとき、右側みぎがはのとある冠木門かぶきの下したに踞うずくまれる物もの体たいありて、わが登あしおと音おと

に蠢けるを、例の眼にてきつと見たり。

八田巡査はきつと見るに、こはいと寔々しき婦人なりき。

一個の幼児を抱きたるが、夜深けの人目なきに心を許しけん、帯を解きてその幼児を膚に引き緊め、着たる檻樓の綿入れを衾となして、少しにても多量の暖を与えんとせる、母の心はいかなるべき。よしやその母子に一銭の恵みを垂れずとも、たれか憐れと思わざらん。

しかるに巡査は二つ三つ婦人の枕頭に足踏みして、

「おいこら、起きんか、起きんか」

と沈みたる、しかも力を籠めたる声にて謂えり。

婦人はあわただしく蹶ね起きて、急に居住まいを繕いながら、

「はい」と答うる齒の音も合わず、そのまま土に頭を埋めぬ。

巡査は重々しき語気をもて、

「はいではない、こんな処ところに寝ていちやあいかん、疾はやく行け、なんという醜態だ」

と鋭き音调。婦人は恥じて呼吸いきの下にて、

「はい、恐れ入りましたでございます」

かく打ち謝罪わぶるときしも、幼児は夢を破りて、睡眠のうち忘れたる、饑うえと寒さを思い出し、あと泣き出だす声も疲労のため裏溷うらがれたり。母は見るより人目も恥じず、慌あわてて乳房ちぶさを含ませながら、

「夜分のごとでございますから、なにとぞ旦那様だんなお慈悲でございますい

ます。大眼おおめに御覽あそばして」

巡査は冷然として、

「規則に夜昼はない。寝ちやあいかん、軒下で」

おりからひとしきり荒すさぶ風は冷ひやを極きわめて、手足も露あわなる婦人おんなの膚はだを裂ひきて寸断すんたんせんとせり。渠みちはぶるぶると身を震ふるわせ、鞞まりのごとくに竦すくみつつ、

「たまりません、もし旦那、どうぞ、後生でございます。しばらくここに置きあそばしてくださいまし。この寒さにお堀端の吹き曝さらしへ出でましては、こ、この子こがかわいそうでございます。いろいろ災難あに逢あひまして、にわかものの物貫ものいで勝手わは分わかりませぬ……」といいかけて婦人むせは咽むせびぬ。

これをこの軒の主人あるじに請わば、その諾否いまだ計りがたし。し
かるに巡査は肯きき入れざりき。

「いかん、おれがいったんいかんといつたらなんといつてもいか
んのだ。たといきさまが、観音様の化身でも、寝ちやならない、
こら、行けというに」

三

「伯父おじさんおあぶのうございますよ」

半蔵門の方より来たりて、いまや堀端ほりばたに曲がらんとするとき、
一個の年とし紀わか少かき美人はその同つ伴れなる老人の躡まん躡さんたる酔歩に向か

いて注意せり。渠は編み物の手袋を嵌めたる左の手にぶら提灯を携えたり。片手は老人を導きつつ。

伯父さんと謂われたる老人は、ぐらつく足を踏み占めながら、「なに、だいじょうぶだ。あれんばかしの酒にたべ酔つてたまるものかい。ときにもう何時だろう」

夜は更けたり。天色沈々として風騒がず。見渡すお堀端の往来は、三宅坂にて一度尽き、さらに一帯の樹立ちと相連なる煉瓦屋にて東京のその局部を限れる、この小天地寂として、星のみひややかに冴え渡れり。美人は人ほしげに振り返りぬ。百歩を隔てて黒影あり、靴を鳴らしておもむろに来たる。

「あら、巡查さんが来ましたよ」

伯父なる人は顧みて角燈の影を認むるより、直ちに不快なる音調を帯び、

「巡查がどうした、おまえなんだか、うれしそうだな」

と女の顔をむすめ瞻みまもれる、一眼し盲めくらいて片へん眼がん鋭えいし。女はギツクリとしたるさま様なり。

「ひどく寂しゆうございますから、もう一時前でもございましたよ
うか」

「うん、そんなものかもしれない、ちつとも腕車くるまが見えんからな」
「ようございますわね、もう近いんですもの」

やや無言にて歩を運びぬ。酔える足ははかど撈取はかどらで、靴音は早や近づきつ。老人は声高に、

「お香、今夜の婚礼はどうだった」と少しく笑みを含みて問いぬ。
女は軽くうけて、

「たいそうおみごとでございました」

「いや、おみごとばかりじゃあない、おまえはあれを見てなんと
思った」

女は老人の顔を見たり。

「なんですか」

「さぞ、うらやましかつたらうの」という声は嘲るごとし。

女は答えざりき。渠はこの一冷語のためにいたく苦痛を感じた
る状見えつ。

老人はさこそあらめと思える見得にて、

「どうだ、うらやましかつたろう。おい、お香、おれが今夜彼家あすこの婚礼の席へおまえを連れて行つた主意を知つとるか。十二、はいだ。はいじやない。その主意を知つてるかよ」

女は黙しぬ。首こうべを低たれぬ。老夫はますます高調子。

「解わかるまい、こりやおそらく解るまいて。何も儀式を見習わせようためでもなし、別に御馳走ごちそうを喰くわせたいと思ひもせずさ。ただうらやましがらせて、情けなく思わせて、おまえが心に泣いてゐる、その顔を見たいばつかりよ。ははは」

口氣酒しゆふん芬を吐おもてて面をも向くべからず、女は悄しやうぜん然として横そむに背けり。老夫はその肩に手を懸かけて、

「どうだお香、あの縁えんじよ女は美しいの、さすがは一生の大札だ。

あのまた白と紅あかとの三枚襲がさねで、と羞はずかしそうに坐すわった恰好かつこうというものは、ありや婦人おんなが二度とないお晴れだな。縁女もさ、美しいは美しいが、おまえにや九せいもく目だ。婿もりっぱな男だが、あの巡査にや一段劣る。もしこれがおまえと巡査とであつてみる。さぞ目の覚さむることだろう。なあ、お香、いつぞや巡査がおまえをくねろと申し込んで来たときに、おれさえアイと合がってん点すりや、あべこべに人をうらやましがらせてやられるところよ。しかもおまえが（生命いのちかけても）という男だもの、どんなにおめでたかつたかもしれやアしない。しかしどうもそれ随意まにならないのが浮き世つてな、よくしたものさ。おれという邪魔者がおつて、小気味よく断わつた。あいつもとんだ恥を搔かいたな。はじめからでき

る相談か、できないことか、見当をつけて懸かればよいのに、何も、八田も目先の見えないやつだ。ばか巡査！」

「あれ伯父さん」

と声ふるえて、後ろの巡査に聞こえやせんと、心を置きて振り返る、眼まなこに映ずるその人は、……夜目にもいかで見紛みまがうべき。

「おや！」と一言われ知らず、口よりもれて愕がくぜん然たり。

八田巡査は一注の電気に感ぜしごとくなりき。

四

老人はとっさの間に演ぜられたる、このキツカケにも心着かで

や、さらに気に懸くる様子もなく、

「なあ、お香、さぞおれがことを無慈悲なやつと怨んでいよう。

吾やおまえに怨まれるのが本望だ。いくらでも怨んでくれ。どうせ、おれもこう因業じゃ、いい死に様もしやアしまいが、何、そりやもとより覚悟の前だ」

真顔になりて謂う風情、酒の業とも思われざりき。女はようよ
う口を開き、

「伯父さん、あなたまあ往来で、何をおっしゃるのでございます。早く帰ろうじやございませんか」

と老人の袂を曳き動かし急ぎ巡査を避けんとするは、聞くに堪えざる伯父の言を渠の耳に入れじとなるを、伯父は少しも頓

着^くせで、平氣に、むしろ聞^きこえよがしに、

「あれもさ、巡査だから、おれが承知しなかつたと思われると、何か身分のいい官員か、金^{かねもち}満でも扱^{えら}んでいて、月給八円におぞ毛をふるつたようだが、そんな賤^{いや}しい了^{りようけん}簡^{かん}じゃない。おまえのきらいな、いっしょになると生き血を吸われるような人間でな、たとえばかつたい坊だとか、高利貸しだとか、再犯の盜^{ぬすつと}人^{ひと}とでもいうような者だつたら、おれは喜んで、くれてやるのだ。乞食^{こじき}でもあつてみる、それこそおれが乞食をしておれの財産をみなそいつに譲^{ゆづ}つて、夫婦^{めおと}にしてやる。え、お香、そうしておまえの苦しむのを見て楽しむさ。けれどもあの巡査はおまえが心^{しん}からすいてた男だろう。あれと添われなけりや生きてる効^{かい}がないとまで

に執心の男だ。そこをおれがちゃんと心得てるから、きれいさつぱりと断わった。なんと慾よくのないもんじやあるまいか。そこでいったんおれが断わった上はなんでもあきらめてくれなければならないと、普通なみの人間ならいうところだが、おれがのはそうじやない。伯父さんがいけないとおつしやつたから、まあ私も仕方がない。いと、おまえにわけもなく断念あきらめてもらった日にやあ、おれが志も水の泡あわさ、形なしになる。ところで、恋というものは、そんなあさはかなもんじやあない。なんでも剛胆なやつが危険けんのんな目に逢あえば逢うほど、いつそう剛胆になるようで、何かしら邪魔がはいれば、なおさら恋しゆうなるものでな、とても思い切れないものだということを知っているから、ここでおもしろいのだ。どう

だい、おまえは思い切れるかい、うむ、お香、今じゃもうあの男を忘れたか」

女はややしばらく黙したるが、

「い……い……え」ときれぎれに答えたり。

老夫は心地こころちよげに高く笑い、

「むむ、もつともだ。そうやすつぽくあきらめられるようでは、わが因業も価値ねうちがねえわい。これ、後生だからあきらめてくれるな。まだまだ足りない、もつとその巡査を慕うてもらいたいものだ」

女はこらえかねて顔を振り上げ、

「伯父さん、何がお気に入りませんで、そんな情けないことをお

つしやいます、私は、……」と声を飲む。

老夫は空そらうそぶ嘯そぶき、

「なんだ、何がお気に入りに入りませんか？ 謂いうな、もつたいない。な

んだってまたおそらくおまえほどおれが気に入ったものはあるま
い。第一容きりよう色いろはよし、氣立てはよし、優しくはある、すること

なすこと、おまえのことといつたら飯のくいようまで気に入るて。

しかしそんなことで何、巡査をどうするの、こうするのという理り
窟くつはない。たといおまえが何かの折に、おれの生命いのちを助けてくれ

てき、生命の親と思えばとても、けつして巡査にやあ遣やらないの

だ。おまえが憎い女ならおれもなに、邪魔をしやあしねえが、か
わいいから、ああしたものさ。氣に入るの入らないのと、そんな

こたあ言つてくれるな」

女は少しきつとなり、

「それではあなた、あのおかたになんぞお悪いことでもございませぬ」

かく言い懸けて振り返りぬ。巡査はこのとき囁く声をも聞くべき距離に着々として歩しおれり。

老夫は頭を打ち掉りて、

「う、んや、吾やあいつも大好きさ。八円を大事にかけて、世の中に巡査ほどのものはないと澄ましているのが妙だ。あまり職掌を重んじて、苛酷だ、思い遣りがなさすぎると、評判の悪いのに頓着なく、すべ一本でも見免さない、アノ邪慳非道なところ

ろが、ばかにおれは氣に入ってる。まず八円の価値ねうちはあるな。八円じゃ高くない、禄盗人ろくとはいわれない、まことにりっぱな八円様だ」

女はたまらず顧みて、小腰を屈かがめ、片手をあげてソト巡査を拝みぬ。いかにお香はこの振舞ふるまいを伯父に認められじとは勉めつとめん。瞬間にまた頭こうべを返して、八田がなんらの挙動をもてわれに答えしやを知らざりき。

五

「ええと、八円様に不足はないが、どうしてもおまえを遣やること

はできないのだ。それもあいつが浮気うわきもので、ちよいと色に迷つたばかり、おいやならよしなさい、よそを聞いてみますという、お手軽なところだと、おれも承知をしたかもしれんが、どうしておれが探ってみると、義延よしのぶ（巡查の名）という男はそんな男と男が違ちがう。なんでも思い込んだらどうしても忘れることのできない質たちで、やっぱりおまえと同おんなじ一いっように、自殺でもしたいといふうだ。ここでおもしろいて、はははははは」と冷笑あざわらえり。

むすめ女は声をふるわして、

「そんなら伯父さん、まあどうすりやいいのでございます」と思おもい詰しめたる体ていにて問いぬ。

伯父は事もなげに、

「どうしてもいけないのだ。どんなにしてもいけないのだ。とてもだめだ、なんにもいうな、たといどうしても肯ききやあしないから、お香、まあ、そう思つてくれ」

女はわつと泣きだしぬ。渠かれは途中なることをも忘れたるなり。伯父は少しも意に介せず、

「これ、一生のうちにとだ一度いおうと思つて、今までおまえにもだれにもほのめかしたこともないが、ついでだから謂いつて聞かす。いいか、亡なくなつたおまえのお母つかさんはな」

母という名を聞くやいなや女はにわかにわかに聞き耳立てて、

「え、お母さんが」

「むむ、亡なくなつた、おまえのお母さんには、おれが、すっかり

惚ほれていたのだ」

「あら、まあ、伯父さん」

「うんや、驚くこたあない、また疑うにも及ばない。それを、そのお母さんを、おまえのお父とつさんに奪とられたのだ。な、解わかつたか。もちろんおまえのお母さんは、おれがなんだということも知らず、弟おとともやつぱり知らない。おれもまた、口へ出したことはないが、心では、心では、実におりやもう、お香、おまえはその思い遣やりがあるだろう。巡査というものを知つてゐるから。婚礼の席に連なつたときや、明け暮れそのなかのいいのを見ていたおれは、ええ、これ、どんな気がしたとおまえは思う」

という声濁りて、痘とうこん痕みの充みてる頬ほお骨ほね高たかき老顔らうがんの酒氣しゆきを帯び

たるに、一眼の盲しいたるがいともものすぎきものとなりて、拉とりぐばかり力を籠こめて、お香の肩を掴つかみ動かし、

「いまだに忘れない。どうしてもその残念さが消え失うせない。そのためにおれはもうすべての事業を打ち棄すてた。名誉も棄すてた。家も棄すてた。つまりおまえの母親が、おれの生しょう涯がいの幸福と、希望とをみな奪うつたものだ。おれはもう世の中に生きてる望みはなくなつたが、ただ何とぞしてしかえしがしたかつた、といつて寝ね刃たばを合わせるじゃあない、恋に失望したもののその苦痛くるしみというものは、およそ、どのくらいであるということ、思い知らせたいばかりに、要いらざる生命いのちをなからえたが、慕こい合つて望のぞみが合あうた、おまえの両親に対しては、どうしてもその味を知らせ

よう手段がなかった。もうちつと長生きをしていりや、そのうちにはおれが仕方を考えて思い知らせてやろうものを、ふしあわせだか、しあわせだか、二人ともなくなつて、残つたのはおまえばかり。親身といつてほかにはないから、そこでおいらが引き取つて、これだけの女にしたのも、三代崇^{たた}る執念で、親のかわりに、なあ、お香、きさまに思い知らせたさ。幸い八田という意中人^{おもいもの}が、おまえの胸にできたから、おれも望みが遂げられるんだ。さ、こういう因縁があるんだから、たとい世界の金満^{かねもち}におれをしてくれるといつたつて、とても謂^いうこたあ肯^きかれない。覚悟しろ！

所詮^{しよせん}だめだ。や、こいつ、耳に蓋^{ふた}をしているな」

眼^めにいつぱいの涙を湛^{たた}えて、お香はわなわなふるえながら、両

袖そでを耳にあてて、せめて死刑の宣告を聞くまじと勤めたるを、老夫は残酷にも引き放ちて、

「あれ！」と背そむくる耳に口、

「どうだ、解わかったか。なんでも、少しでもおまえが失望の苦痛くるしみをよけいに思い知るようにする。そのうち巡査のことをちつとでも忘れると、それ今夜のように人の婚礼を見せびらかしたり、気の悪くなる談話はなしをしたり、あらゆることをして苛いじめてやる」

「あれ、伯父さん、もう私は、もう、ど、どうぞ堪忍してくださいまし。お放しなすつて、え、どうしようねえ」

とおぼえず、声を放ちたり。

少し距離を隔てて巡行せる八田巡査は思わず一足前に進みぬ。

渠かれはそこを通り過ぎんと思ひしならん。さりながら進まざりき。渠は立ち留まりて、しばらくして、たじたじとあとに退さがりぬ。巡查はこのところを避けんとせしなり。されども渠は退かざりき。造次ぞうじの間八田巡查は、木像のごとく突っ立ちぬ。さらに冷然として一定の足並みをもて肅々と歩み出だせり。ああ、恋は命なり。間接にわれをして死せしめんとする老人の談話はなしを聞くことの、いかに巡查には絶痛なりしよ。ひとたび歩を急にせんか、八田は疾とくに渠らを通り越し得たりしならん、あるいはことさらに歩をゆるうせんか、眼界の外に渠らを送遣し得たりしならん。されども渠はその職掌を堅守するため、自家が確定せし平時における一式の法則あり。交番を出でて幾曲がりの道を巡り、再び駐在所に帰る

まで、歩数約三万八千九百六十二と。情のために道を迂回し、あるいは疾走し、緩歩し、立停するは、職務に尽くすべき責任に対して、渠が屑しとせざりしところなり。

六

老人はなお女の耳を捉えて放たず、負われ懸くるがごとくにして歩行きながら、

「お香、こうは謂うものな、おれはおまえが憎かあない、死んだ母親にそっくりでかわいくつてならないのだ。憎いやつなら何もおれが仕返しをする価値はないのよ。だからな、食うことも衣

ること、なんでもおまえの好きなとおり、おりや衣なくてもおまえには衣せる。わがままいっばいさしてやるが、ただあればかりはどんなにしても許さんのだからそう思え。おれももう取る年だし、死んだあとでと思うであろうが、そううまくはさせやあしない、おれが死ぬときはきさまもいっしよだ」

恐ろしき声をもて老人が語れるその最後の言ことばを聞くとひと齊しく、お香はもはや忍びかねけん、力を極きわめて老人が押えたる肩を振り放し、ばたばたと駈いけ出だして、あわやと見る間に堀ほり端ばたの土手へひたりと飛び乗のりたり。コハ身を投なぐる！ と老人は狼うろた狽たえて、引き戻さんと飛び行きしが、酔眼に足場をあやまり、身を横よこざまに霜すべをすべりて、水にざんぶと落ち込みたり。

このとき疾く救護のために一躍して馳せ来たれる、八田巡查を見るよりも、

「義さん」と呼吸せわしく、お香は一声呼び懸けて、巡查の胸に額を埋めわれをも人をも忘れしごとく、ひしとばかりに縋り着きぬ。蔦をその身に絡めたるまま枯木は冷然として答えもなさず、堤防の上につと立ちて、角燈片手に振り翳し、水をきつと瞰下ろしたる、ときに寒冷謂うべからず、見渡す限り霜白く墨より黒き水面に烈しき泡の吹き出ずるは老夫の沈める処と覺しく、薄氷は亀裂しおれり。

八田巡查はこれを見て、躊躇するもの一秒時、手なる角燈を差し置きつ、と見れば一枝の花簪の、徽章のごとくわ

が胸に懸かかれるが、ゆらぐばかりに動悸どうきはげ烈しき、お香の胸とおのが胸とは、ひたと合あひてぞ放はなれがたき。両手を静かにふり払はらいて、

「お退どき」

「え、どうするの」

とお香は下より巡査の顔を見上げたり。

「助けてやる」

「伯父さんを？」

「伯父でなくってだれが落ちた」

「でも、あなた」

巡査は儼げんぜん然として、

「職務だ」

「だってあなた」

「巡査はひややかに、「職掌だ」

「お香はにわかになりに心着き、またさらに蒼あおくなりて、

「おお、そしてまああなた、あなたはちつとも泳ぎを知らないじやありませんか」

「職掌だ」

「それだって」

「いかん、だめだもう、僕も殺したいほどの老爺おやじだが、職務だ！

断あきらめ念ろ」

と突きやる手に喰くい附つくばかり、

「いけませんよう、いけませんよう。あれ、だれぞ来てください

な。助けて、助けて」と呼び立つれど、土堀石垣寂として、前後十町に行人絶えたり。

八田巡査は、声をはげまし、

「放さんか！」

決然として振り払えば、力かなわで手を放てる、咄嗟に巡査は一躍して、棄つるがごとく身を投ぜり。お香はハツと絶え入りぬ。あわれ八田は警官として、社会より荷^{にな}える負債を消却せんがため、あくまでその死せんことを、むしろ殺さんことを欲しつつありし悪魔を救わんとして、氷点の冷、水凍る夜半^{よわ}に泳ぎを知らざる身の、生命とともに愛を棄てぬ。後日社会は一般に八田巡査を仁なりと称せり。ああはたして仁なりや、しかも一人の渠^{かれ}が残忍苛酷^{かこく}

にして、恕じよすべき老車夫を懲罰し、憐あわれむべき母と子を厳責したりし尽瘁じんすいを、讚さんたん歎するもの無きはいかん。

〔#地付き〕（明治二十八年四月「文芸倶楽部」）

底本：「高野聖」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年4月20日改版初版発行

1999（平成11）年2月10日改版40版発行

初出：「文芸倶楽部」

1895（明治28）年4月

入力：真先芳秋

校正：鈴木厚司

1999年9月10日公開

2005年12月4日修正

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

巻数

2020年 7月13日 初版

奥付

発行	サンプルサークル
著者	作者
URL	http://writer.sample.org/
E-Mail	writer@sample.org
作成	青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL	http://aozora.xisang.top/
BiliBili	https://space.bilibili.com/10060483

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>